



# 談話室



## 『新しい交通基盤の有無は、地域の盛衰を決する』 ～ 空港のある静岡県へ向けて ～

### 3 時代の主流となる交通基盤の有無は、地域の盛衰を決する

新しい交通基盤や駅などを設置するにあたっては、未知のものに対する不安や近視眼的な判断から、消極的な結論を選んでしまうことがあります。その判断が、その後の地域の盛衰を決することになったケースは各地にあります。ここで明治期の三島の例を紹介いたします。

#### < 明治期の三島 >

東海道線全線開通にあたっての政府案は、小田原から御殿場まわりで沼津へつながるルートになっており、三島を通らないものでした。しかし、明治17年に政府は、三島に熱意があり、駅舎建設のために3千円を地元が負担すれば、ルートを再考すると三島に投げかけました。

三島の宿屋の旦那衆は、「汽車は旅客を遠くへ連れ去るものだ」と判断し、政府の申し出を断りました。その結果、明治22年に全線開通した東海道本線は三島を通らず、徒歩時代の東海道の名立たる宿場まちであった三島は“陸の孤島”となり、宿屋という宿屋がつぶれてしまったわけです。

この話は、司馬遼太郎さんの随想録の中に、三島に宿泊された際のエピソードとして紹介されています。その中で、司馬さんは「19世紀は、先進の欧州においては、圧倒的に鉄道文明の時代であったが、そういう文明時代がきていることに、三島の人はあるいは鈍感だったのかもしれない。」とコメントしています。また、大岡信さんに少年時代の三島の印象を聞いたところ、「隠居のまちというか、しずかというよりも、退嬰的なまちでした。」と語られたとの思い出も紹介されています。

出典 「以下、無用のことながら」司馬遼太郎 著 文藝春秋

その後、丹那トンネルの開通により、昭和9年に、ようやく東海道線の三島駅が開業し、その後、昭和44年には新幹線三島駅が開業しました。いずれも、三島の方々の熱心な陳情や誘致運動が実を結んだものですが、この背景には、明治期の東海道線の開通時に、三島が取り残されてしまったという苦い経験があることは否定できないでしょう。東海道本線と新幹線の駅があることによって、現在の三島は、東部地域の主要都市としての風格と、沼津と対等以上の意気を持っておられます。

交通基盤の有無は、地域の魅力や活力を高める上で、大きな影響を及ぼします。判断の誤りは、地域の衰退を招くこともあるのです。大交流・大競争時代を見据えた空港の整備を進めている中、こうした過去の事例は、貴重な指針を与えてくれま

す。

---

[《トップページ》](#)

- [1 改めて静岡空港の意義](#)
- [2 需要予測を巡る議論](#)
- [3 時代の主流となる交通基盤の有無は、地域の盛衰を決する](#)
- [4 残された用地の解決に向けて](#)
- [5 今なすべきこと](#)

---

[談話室](#)

[知事室トップページ](#)